

選評

種田佳紀

今回、「名前のない星」プロジェクトが戯曲賞と批評賞の2本立てで立ち上げられたことには、プロジェクト代表自身の演劇界への想いがあったのだと感じる。演劇という文化を次世代につなげていくためには、現役世代のクリエイターの自己研鑽や裾野の広がりも大切だが、同時に観客と一緒に育っていくこと、両者が相互にエンパワメントしあう環境を用意することも必要不可欠なのだ。

その点で、今回は応募者こそ少なかったものの、批評は全国から集まり、また意欲的な作品ばかりで、本賞の当初の狙いに対する手応えを感じることができた。この場を借りて、すべての応募者に改めて御礼申し上げたいと思う。

どの作品も読み応えがあり、ユニークな着眼点を持った作品であったが、選者は、着眼点の独自性、演劇の批評となっているか（三好の原作のみを読んで書いてしまうものではないか）、それ自体が独立した作品性を有しているかの3点を重視して選考を行った。

優秀賞に選ばれた「社会生活」は、「殺意」が2024年夏の円頓寺で上演されたという大きなコンテキストに意識を振り向けつつも、「殺意」のメッセージ性、今回の演出と俳優・田口の表現や狙い、そして筆者である吉沢氏の個人的な体験までも包摂し、総合的な批評としての目配りの広さが目を引いた佳作であった。

今後もこうしたまとまった言葉による顕名的な批評活動が、SNS上の断片的で匿名的な語りに伍する形で、社会の中で大切にされていって欲しいと願う。また、本賞が引き続きそうした批評活動をささやかながら支援するものになればよいと願ってやまない。